紫苑の誇り明日へ

卒業生（家政９回生・S36 卒）　渡辺　満利子
客員教授・元教育研究会議委員

風の如、現れた蓑茂壽太郎先生 (前理事長) は私に告げられた。『教育研究会議委員を依頼したい』と。爾来、熊本県立大学の明日を身近に感じている。熊本女子大学在学中は、木下サキ先生のご薫陶を授かり、調理科学界では最先端の調理と物理、そして食文化を融合させた研究を促され、教育実習に奔走する一方、笹原イネ先生のご指導を受け、ハレルヤに陶酔し、バドミントン界チャンピオン伊藤基記先生の技のみならず、挑戦への情熱を肌で感じ、大学時代を謳歌した。

しかし卒後、病院スタッフとして社会人第一歩を踏み出すや否や、人間栄養学に不可欠な医学等の不勉強を思い知らされた。学び直しは、今しかない、と決意し医学の道を究めるべく東京へ出奔した。当時の苦悶・苦闘は次の名歌と重なる新たな出発でもあった。

『ふるさとは遠きにありて思ふもの そして悲しくうたふもの よしや　うらぶれて 異土の乞食となるとても 帰るところにあるまじや ひとり都のゆふぐれに ふるさとおもひ涙ぐむ・・』(室生犀星 抒情小曲集（１９１８）「小景異情」その二)

さて、冒頭の望外な任務をいただき卒後半世紀を経て母校に帰還し、その発展と深化を目の当たりにしたとき、母校の研究・教育における先哲に想いを馳せ、自ら為すべきことに勇気を得た。なかでも、後輩の専門性とマンパワーアップを通し地域貢献を支援するために、熊本県内中学十九校を対象として、ライフスタイル改善に拠る心身の健康リスクの減少効果をクラスター無作為化比較試験という精度の高い研究手法に基づき検証した。このエビデンスは欧米誌に掲載された母校後輩の誇り高き成果である。この想いを明日に、未来永劫に繋げたい。

半藤英明学長が述べられた次の名言を結びとしたい。

『大学とは、学問の場であります。』『学問は、真理の追究を目的とします。如何なる学問にも真理の解明が動機にあります。真理とは正しい道理であり、嘘のない真実であります。』中略、『学問は人類の幸福のために存在し続けると信じます。』(半藤英明　２０１６)

二〇十七年七月三十日

母校での学びが大きな糧に

卒業生（家政 12 回生・S39 卒）　本田　栄子
元同窓会紫苑会会長・元経営会議委員

熊本県立大学創立７０周年を心よりお喜び申し上げます。

熊本女子専門学校から熊本女子大学、平成６年女子大から共学熊本県立大学となり、古きよき伝統と歴史が先輩から後輩へと脈々と受け継がれている喜びを感じています。

入学した昭和３５年に学科増設が行われ１学部３学科体制の中、家政学科の入学生は９４名と他学年の中で一番多い学年でした。入学式で北村学長の祝辞後、木造の講堂の前で「学章」を全員胸につけ沼先生を囲み記念撮影をしました。卒後５０年のクラス会時にその写真を配布し学生時代の思い出の中で時が過ぎました。

翌年熊本女子大の校歌が出来、学生寮も学内に移転、同窓会館が出来るなど画期的な４年間の中で有意義な学生生活を送る事が出来ました。

当時は伊藤先生指導の「バトミントン」部や、永目先生顧問の「マンドリンクラブ」が部活動では盛んでした。私は先輩の勧めで社会福祉活動（日赤奉仕団）に参加、児童福祉施設訪問や盲学校での図書の点字奉仕活動は貴重な経験でした。

教養科目から専門科目へ中でも統計学の学びや、化学実験では分析結果が出るまで時間を忘れて実験を続けた事、木下サキ先生の調理学・実習では、科学的根拠に基づいた理論と実践、また「調理の心」盛り付け方、器の選び方等厳しい指導の学びが卒業後の研究や仕事の上でも活かされ、素晴らしい先生方に指導していただいた事に感謝しています。

卒後、教職か、行政に進み専門性を活かすか、その選択の中では、郊外実習や教育実習での先輩方の指導と活躍が大きな支えとなり、「熊女」としての絆が強くは結ばれていることに誇りとうれしさを感じています。

創立７０周年という記念すべき好機に熊本県立大学の歴史と伝統を振り返り、未来に向かって県立大が目指す「地域に生き、世界に伸びる」唯一の公立大学として更なる８０年９０年に向かって一層飛躍されますことを御祈念いたします。

創立７０周年記念メッセージ

卒業生（食物 18 回生・S45 卒）　閔　幸枝
前同窓会紫苑会会長・元経営会議委員

熊本県立大学創立７０周年おめでとうございます。

昭和４５年に熊本女子大学食物学科を卒業し、１８回生として同窓会紫苑会に所属し、同窓会活動に協力いたしております。

６年前、同窓会紫苑会会長として、卒業式に列席させて頂きました。会場は熊本県立劇場でしたが、この地は熊本女子大学時代の跡地であるという事で大変感慨深いものを感じました。挨拶の中にもそれに触れ、食物実習や卒業論文では、調理科学で著名な木下サキ先生に教えを頂いたこと、部活ではマンドリンクラブで毎日練習に明け暮れたこと。アルバイト等をする暇などなく、ひたすら勉学・部活に励んだことが思い出されます。

会長としての挨拶では、卒業をお祝いすると共に、同窓会紫苑会への入会をお祝いする嬉しさで溢れていたように思います。大江の地から白亜の塔が立つ月出の地に校舎も移り、女性だけの時代から男女共学の時代へと大きな変化が見られましたが、物事に堅実に向かう姿勢、優しく人に接する気質を持つ女子大時代からの資質が、今、県大生に繋がることも同窓会活動の大きな目標と考えます。地域での役立つ人間として育っている様子、学生の方々のいろんな分野で活躍している姿をテレビ・新聞・ラジオなどで知ることが、先輩として誇りであり、後輩を引き立てていく原動力になるのではないでしょうか。

選ばれる大学であるには、質の高い即ち存在価値の高さであると、同窓生たちと話すことがあります。７０年の歴史の中で、いろんな方面で活躍し、立派な足跡を残していった先輩方、まさに今、活躍している方々等の情報を、広報誌「紫苑」を活用し、現役生、卒業生共に、刺激し合いましょう。

自分の持っている何かを、誰かのために役に立てましょう。その基礎は、大学で学んでいるはずです。県大では、学び直しにも門戸を開いていらっしゃいます。年齢関係なく話し合う場所作りから、わが同窓会紫苑会は協力しましょう。大学と同じ年に誕生した私、７０歳。残りあと何年ありますでしょうか！

創立７０周年にあたって

卒業生（食物 24 回生・S51 卒）　横田　桂子
同窓会紫苑会会長・経営会議委員

創立７０周年を迎えるにあたり、心からお慶びを申し上げます。

日々国内外で活躍される卒業生各位の姿には感動を覚えます。また同窓生として、歴史と伝統のある本学で学べたことに喜びと誇りを感じているところです。

私達は熊本女子大学の頃で、木造づくりの大江キャンパスが学び舎でした。充実していたとは言えない実験器具等ではありましたが、皆真面目な学生でネズミの解剖の実習等は食物科にとっては忘れられない授業の一つでした。

その当時の思い出として、他大学生との合ハイ・合コン・ダンパなどがあり、女子大生にとって男子学生との交流の場は、胸ときめかせたひと時でもありました。

歴史を重ねる中で、大江から月出の白亜のキャンパスへ移転し、さらに総合管理学部の創設とともに男女共学となり、女子大としての面影はなくなりましたが、その時代の学生が伝統を守り歴史を積み重ねてくれたことに感謝したいと思います。ここに７０年の時を超え同窓生としての繋がりを強く感じているところです。

また、１０年程前から本学で講義に携わるようになり、母校においての後輩への指導は、私にとってこの上もない喜びでもあります。さらに、昨年より同窓会会長という重責を担うこととなり、大学や学生との交流の場も増え、現在の県立大学を取り巻く状況を理解するうえでも大変貴重な経験となっております。

中でも熊本地震の際、本学学生の行動には大変感動したものでした。自らも被災している中、高齢者のため地域住民のために、積極的に行動する学生の姿には感動するとともに、同窓生として頼もしさを感じたものです。

“地域に生き、世界に伸びる”大学のスローガンのもと、逞しく成長する学生！きっとこれからも県立大学の歴史の一ページを刻み続けてくれるものと確信しています。

これからも、微力ではありますが、県立大学の、そして県立大学生の益々の飛躍を心から応援して参ります！

熊本県立大学創立７０周年に寄せて
「人生で大切なことは大学で見つけた」

卒業生（英文 27 回生・S54 卒）　三藤　由美

昨年還暦を迎えた。まだまだ振り返る程長生きはしていないが、今迄の人生で自分なりにキラキラと輝いていたと思える時期が何度かある。その中のひとつが大学時代だ。

私は書道部に属していたが、熊本の他大学との繋がりが強く、活動に向けての話し合いや合同錬成会、合宿等が活発に行われていた。又、九州内の大学との交流も盛んだった。大学にはこちらが行動を起こせば新しい出会いが次々とやってくる面白さがあった。学内はもちろん、他大学であっても、先生や先輩を訪ねて行けば快く教え、指導してくれた。今の私の人間関係の基礎は、この時に作られたものだと確信できる。

生き方のルールのようなものも、この時期に出来た。「迷った時にはやってみる」もそのひとつだ。若く経験も無いので新しいことに挑戦するには勇気が必要だった。失敗を恐れ、つい尻込みをしてしまう。しかし、仮に失敗したにしても、行動して失敗するのと何もせずにいるのとでは、どちらの後悔に意味があるかと考えた時、私は前者を選んだ。うまくいったら自分の糧となる。失敗してもそれは教訓となる。「決めるのは私だ」と自分に言い聞かせたのも大学時代だ。大切な自分の人生の決定権を人任せにするようなことはしたくなかった。親はハラハラしながら見ていたに違いない。随分背伸びをして大目玉を食らったこともあったが、早く親の庇護から抜け出し自立したい、親の価値観ではなく、自分の価値観で生きたいとの思いもあった。

思えば赤面の至りも多々あったが、そこは若さゆえの図々しさで乗り切った。あれはあれで良かったのだと納得できる。

県大の皆さん、世界は若いあなた方を待っています。失敗を恐れず挑戦して下さい。そして在学中に、人生に立ち向かう為の哲学、教養、友情その他たくさんの大切なものを見つけて下さい。私はそれらを身に付け逞しくなったあなた方と出会うのを心から楽しみにしています。

熊本県立大学創立 70 周年へよせるメッセージ

卒業生（国文 29 回生・S56 卒）　岩越（いわごえ）優子

29 回生国文の旧姓工藤優子です。早いもので卒業して 37 年、来年は還暦を迎えます。私たちは大江キャンパスで 3 年間、今の「月出（当時は水洗）」のキャンパスで 1 年学びました。当時はまだ「女子大」で、黒い角帽とガウンを身に付けて、現在の中ホールで初めて卒業式をした回生です。引っ越した初年度だったため、校内の建物も樹木もまばらで、周りも静かな田園風景だったように記憶しています。

私は、2 年生まで軟式テニス部に所属していて、夏休みは、同窓会館の和室で合宿をしました（そうそう、同窓会館には結婚相談所もありました）。テニスコートの北側には熊本学園大学（当時は「商大」）との境の高い塀があり、休み中に茂った夏草の掃除が大変でした。今の県立劇場の駐車場は、大江キャンパスのテニスコートや運動場などがあった場所です。車を停めるたびに、暑い夏の日、草取りに励んだことや、伊藤先生の体育の授業でゴルフの練習をしたことなどを懐かしく思い出します。

子育ても少し落ち着いた 15 年ほど前、担任をしていただいた竹原先生が同窓会「紫苑会」の活動で「源氏物語」を講読していらっしゃると聞き、早速入会しました。「澪標（みおつくし）」の巻から入り、今は「玉鬘（たまかずら）」を読んでいます。

また 2 年前、次男が県立大学の総合管理学部を卒業しました。保護者として役員もさせていただきました。「我が子が大学の後輩」というのは、本当に嬉しいものです。

さらに、昨年の熊本地震での県大生の活躍を聞くたびに、頼もしく、そして誇らしく感じました。今年の九州北部の豪雨災害にも早くからボランティアに参加しているということで、若い学生のパワーをうらやましく思います。

私たち同窓生は、これからも母校熊本県立大学を、そして学生たちを応援していきます。